

都市と死者

——『ユリシーズ』第6挿話「ハデス」における
ダブリン市民たちと共同体¹⁾——

The Dead in the City :
The Dubliners and Their Community in “Hades”

高橋大樹

要 旨

本論文では、ジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の『ユリシーズ』(Ulysses, 1922) の第6挿話「ハデス」(“Hades”) を取り上げ、そこに描かれる都市と死者の関係性について考察する。本挿話「ハデス」では、レオポルド・ブルームが友人ディグナムの葬儀に出席するため、他の出席者とともに馬車に乗り込む場面から描かれる。その馬車はダブリン市内を移動し、埋葬が行われるプロスペクト墓地へと向かう。墓地へ向かう車窓からブルームが目にするものは、ダブリンの街に住む顔見知りやさまざまなダブリンの様子である。さらに墓地ではこれまで多くのジョイス研究者がその正体を論じてきた「マッキントッシュの男」(Macintosh) として知られる謎の男をも目撃する。第6挿話「ハデス」を死者と都市を描く文学作品の系譜において考えたとき、それまでの作品との差異はどこにあるのか、さらにブルームがどのように表象されるのか、そして読者はそれによってブルームと共同体との関係性についてどのような解釈が可能となるのかに関して考察を試みる。

キーワード

ジェイムズ・ジョイス, 『ユリシーズ』, 「ハデス」, 都市, 共同体

I.

ホメロス (Homer) の『オデュッセイア』 (*The Odyssey*) においてオデュッセウスたちはキルケの島を出たあと、冥界を訪れ亡霊たちと語り合う。『オデュッセイア』を下敷きにしたジェイムズ・ジョイス (James Joyce) の『ユリシーズ』 (*Ulysses*, 1922) においてその場面に对应するのが第6挿話「ハデス」 (“Hades”) である。本挿話において、冥界と対応するのが、パトリック・ディグナム (Patrick Dignam) を埋葬するプロスペクト墓地であり、レオポルド・ブルーム (Leopold Bloom) が馬車内から目にするダブリンという都市はオデュッセウスたちが冥界にたどり着くまでの道のりとなる。第6挿話において、このダブリンの地、より具体的に言うなら墓地へと向かう馬車内やその窓を通じて、あるいは埋葬が行われる墓地でブルームが会おうのは、『ダブリン市民』 (*Dubliners*, 1914) にも登場したキャラクターたちであるが、ブルームとそれぞれのキャラクターが知り合いであるという設定自体、あたかも読者である我々にダブリンという都市が非常に小さな場であると錯覚しかねない状況を生み出しているとも言えるだろう。しかしはたして『ユリシーズ』の設定となっている1904年の現実のダブリンは、歩けば顔見知りと会おうような小さな都市であったのだろうか。おそらく答えは否であろう。それではなぜジョイスはそのような小さなコミュニティを描く必要があったのだろうか。本論文では「ハデス」挿話に対するジョイスの空間設定について考察し、さらにブルームがダブリンという都市において会おう人々との関係性に注目したい。

この第6挿話「ハデス」は、ブルームが友人ディグナムの葬儀に出席するため、他の出席者とともに馬車に乗り込む場面から描かれる。その馬車はダブリン南東部のディグナムの自宅から出発し、市内を北西に移動し、埋葬が行われるプロスペクト墓地へと向かう。墓地へ向かう車窓からブ

ブルームが目にするものは、ダブリンの街を歩き回るスティーヴン・ディエダラス (Stephen Dedalus) や妻モリー・ブルーム (Molly Bloom) の浮気相手であるブレイズ・ボイルン (Blazes Boylan) やさまざまなダブリンの光景である。さらに墓地ではこれまで多くのジョイス研究者がその正体を論じてきた「マッキントッシュの男」(Macintosh) として知られる謎の男を目撃する。第6挿話「ハデス」において、死と生というテーマを通じてジョイスはブルームをどのように表象したのか、さらに読者はそれによってどのような解釈が可能となるのかを考察したい。

II.

ガブラー版テキストで1033行にわたるエピソードである「ハデス」の前半はグラスネヴィン地区にあるプロスペクト墓地に向かう馬車の内部が舞台である。ダブリン南東部のディグナムの家を出発する場面から描かれる。馬車で墓地へと移動しながら、語り手はブルームの視点から外部の様子を描写する²⁾。その描写は読者に馬車の外部だけでなく、同時にその内部も意識させるが、ここで考えたいのは、ジョイスはなぜ馬車内という空間を設定したのかという問題である。ダブリン郊外のプロスペクト墓地へ向かうには相当距離があるため、通常徒歩では向かわないと考えられるが、ジョイスの設定の細かさを考えれば、馬車で移動するという行為に読者は何らかの意味を探りたい誘惑に駆られても不思議ではない。つまり、葬儀に参加するために集団で馬車に乗るという設定を作り上げ、そこに参加するブルームを描くことには何かしらの目的があったと考えることは可能である。一つ手がかりになりそうなのはブルームとその他の同乗者との関係である。

マーティン・カニンガムがまっさきに、シルクハットをかぶった頭

を軋む馬車に突っ込み、手ぎわよく体をいれて腰かけた。ミスタ・パーがそのあとから、長身を用心ぶかく曲げて乗り込んだ。

——乗れよ、サイモン (Come on, Simon)。

——どうぞおさきに、とミスタ・ブルームが言った。

ミスタ・ディーダラスがすばやく帽子をかぶって乗り込みながら返事をした。

——はい、はい。

——みんな揃ったかね？ とマーティン・カニングムがたずねた。乗れよ、さあ、ブルーム (Come along, Bloom)。

ミスタ・ブルームはなかに入り、あいている席に腰かけた。(6. 1-9, 217頁)³⁾

この一見何でもなような引用はこの挿話の冒頭部分であり、読者はこの場面だけでブルームが同乗者たちから距離を置かれていると気付くことは難しいだろう。しかしブルームがこの馬車に乗る順番を自ら考え、決定することができていないことは事実である。この馬車に乗り込む順番が表しているのはブルームの孤立した状況のみならず、ブルーム以外のダブリン市民たちにどうやら何らかの共同体的な認識が存在しているということである。それはブルームに対する呼びかけ (Come along, Bloom.) とサイモン・ディーダラスへの呼びかけ (Come on, Simon.) の違いにも顕著に表れているということが言える。つまり、サイモン・ディーダラスを呼ぶ際にはファーストネームで呼びかけるのに対し、ブルームへのそれはあくまでもファミリーネームであるという違いである。さらに、ブルームの孤立状態を示す具体的な例は、馬車に乗り込む順序だけではなく、この挿話でブルームは馬車を降りる際と、そして葬儀に向かう間、周囲は会話しながら向かうのに、一番最後を一人で歩くことである。そこから我々が推測でき

るのはブルームと周囲の登場人物が作り出す共同体／共同性との間にある溝である⁴⁾。しかしブルームがそれに対して明確に反感を示すことはない。

それはゲオルグ・ジンメルが「大都会と精神生活」の中で説明している都市生活者の性質を、他のダブリン市民以上にブルームの描写の中にジョイスが描いたということが出来るかもしれない。つまり、ジンメルが説明する都市的性格とは、人口密度の高さから生じる経験に対処するために、控えめで、無感動で、第三者的態度のことであり、ブルームの他者への態度は、近代的都市生活者のそれであるようにも思える。

しかしそういったブルームの態度は『ユリシーズ』の内部で頻繁に確認できる類のものであり、この「ハデス」というエピソードからのみ抽出されうるものではない。それではこの「ハデス」という挿話のオリジナリティは一体どこにあるのだろうか。それを理解する手掛かりとなるのが、『ユリシーズ』を書く上で、ジョイスが作った計画表^{スキーム}であり、その計画表は挿話ごとに場所や時刻などの設定を与えているのであるが、この「ハデス」に与えられている「場所」は「墓地」である⁵⁾。ジョイスがこの「ハデス」の場所を「墓地」と設定したのは、ダブリンにすむ都市生活者たちの意識の中にいかに死者がとりついているかということを明らかにするためであったのは自明のことだろう。死者が存在する、あるいは死者に支配されている都市を描くという意味での物語は、ヴァージニア・ウルフを初めとするモダニズム文学の中で決して目新しいものとは言えないだろうし、すぐに想起されるのは第一次世界大戦の影響を受けた一連の作品群であるが、ジョイス作品に限って言えば『ダブリンナーズ』の「痛ましい事件」(“A Painful Case”)が挙げられるだろう⁶⁾。その中で、ミスタ・ダフィーは、4年前に関係を持っていたミセス・シニコアの死を夕刊で初めて知り、彼女の亡霊の息吹を感じる。

[中略] 彼は最初に見つけた門からその公園に入り、やつれた木々の下を歩いた。四年前に二人で歩いたわびしい小道を通った。暗闇の中、彼女が彼の近くにいるかのようだった。時どき彼女の声が彼の耳に触れ、彼女の手が彼の手に触れるような感じがしてきた。彼はじっと立って耳をすませた。どうして私から生きることを取り上げたの？

どうして私に死刑を宣告したの？ 彼は自分の道德心がこなごなに砕けるのを感じた。(Dubliners, 113)⁷⁾

「痛ましい事件」のように死者と生者が交差する瞬間を取り上げる、というより、この「ハデス」という挿話においては、生者が死者に対して行うのは主に一方通行的な回想や噂話であり、ミセス・シニコーのような死者たちからのアプローチが存在しない。その差異を理解するために、『ユリシーズ』におけるダブリンという都市と死者の特殊な関係を考えるとき、次の引用は何かの手がかりになるかもしれない。

どかん！ 転覆する。棺がどしんと道に落ちる。蓋がぱっくり開く。パディ・ディグナムの硬直死体が飛び出して、大きすぎる茶いろの服を着たまま土の上を転がる。赤い顔、いまは灰いろ。口がだらりとあいている。何事だいとたずねているみたい。閉じてあげるべきだ。あいているとひどい顔。それに内臓の腐敗も早い。穴はみんなふさぐほうがずっといい。そう、あれも。蠟でね。括約筋がゆるむ。すべて封印しなくちゃ。(6. 421-426, 245頁)

この場面は、ブルームの内的独白を通して、彼が街角でパディ・ディグナムの死体をのせた霊柩車が転倒して死体が飛び出した場面を想像している部分である。1904年当時のダブリンの状況を知ることでできない我々に

とって、これは単にブルームが死体に対する恐怖感を示しているようにも読める部分であるが、結城によれば、当時のダブリンの死亡率は高く、「埋葬は日常化しており、会葬馬車がオコンネル通りを頻繁に行き来する有り様」(『ユリシーズの謎を歩く』138) だったようだ。実際に当時のダブリンは貧困や公衆衛生の不備により、病気が流行しやすい環境であり、さらに市民の約3分の1にあたる2万世帯の人々は共同住宅の1部屋に住み、そのうち60パーセントは3人以上の同居世帯であった。そのため病気が伝染しやすい環境であり、死亡率の第1位は肺結核だった⁸⁾。ブルームが墓地でネズミを目にして、恐怖を覚えるのもそういった背景があったと考えられる。つまり、当時のダブリンの状況は文字通り死者あふれる都市であったということであり、そう考えるとブルームの想像もあながちあり得ないことではない。ダブリンで死者があふれる状況に対してブルームは次のような改善案を示す。

——そう、とミスタ・ブルームが言った。それからもう一つ、ぼくはいつも思うんだが、市営の葬式電車を作るべきだな。ミラノにあるような、あれですよ。墓地の門まで線路を敷いて、特別電車を走らせる。霊柩車も会葬者用の客車もみんな揃えて。わかりますよね。

——なんとまあ、あきれた話だね、とミスタ・ディーダラスが言った。寝台車に特別食堂車か。

——コーニーにとっては商売あがったりだな、とミスタ・パワーが付け加えた。

——どうして？ とミスタ・ブルームがミスタ・ディーダラスのほうに向き直って尋ねた。二頭立てで駆けつけるよりましでしょう？

——うん、それもそうだな、とミスタ・ディーダラスは認めた。

——それに、とマーティン・カニンガムが言った。ダンフィの角で

霊柩車が引っくり返って棺を道路にほうり出すなんて事故もなくなるよ。

——あれはひどかった、とミスタ・パワーが眉をひそめて言った。
しかも死体まで道路に転がり出た。ひどかった！（6. 405-418, 244-245
頁）

めずらしく馬車の中にいるサイモン・ディーダラスが納得するようなブルームの提案は、ミラノにあるような墓地への直通葬儀列車を市営で作ることである。ギフォードの注釈によれば、どうやら実際にそういった鉄道が1920年代までミラノにあったらしく（114）、ブルームの提案も現実味のない話ではないが、マーティン・カニンガムが述べるような、当時のダブリンで墓地へと向かう馬車が転覆し死体が飛び出したかどうかは多くのジョイス研究者による注釈にも正確な記述かどうかは書かれておらず、真偽はわからないままである。ただ、この描写自体はダブリンという都市と死者の多さの関係性を表象するには適切なエピソードと言えるだろう。このように「ハデス」では死者あふれる都市としてのダブリンが表象される。しかし前述したように死者と都市を描いたモダニズム小説は他にも存在しており、決して目新しいものではない。「ハデス」がそういった文学作品の系譜の中に置かれたとき、異質な光を放つとしたら、それはなぜだろうか。

III.

ところで、ブルームと他者との関係を通じて、提示されるのはブルームの即物的な性格（matter-of-factness）であるとアダムスは述べている⁹⁾。その性格は彼が死者に対して哀悼を示さないということと何らかの関係があると考えることができるだろう。プロスペクト墓地へと向かう馬車の中で

ブルームは子供の棺を運ぶ馬車を目にするが、そこで彼は生後11日目で死んでしまった自分の息子ルーディのことを回想する。

こびとの顔。濃いむらさき色でしわだらけ、ルーディのにそっくり。こびとの体が、パテみたいにもろいのが、白い線をいれた松材の棺に納められて。葬式互助会が費用を払う。週一ペニーで一かけらの芝生。我が家の。小さな。餓鬼。赤ん坊。なんの意味もなかった。自然の過ち。健康なら母親のおかげ。不健康なら父親のせい。次はもっと幸運に。(If it's healthy it's from the mother. If not from the man. Better luck next time.) (6. 326-330, 239頁)

この引用の大半は自らの息子ルーディの死の姿の回想であり、さらに「もし生まれた子供が健康でないなら、それは父親に原因がある」とブルームは述べる。それはまるで自らに子供の死の原因を求めているかのようである。しかし注目したいのは、引用部分の最後の独白である。「次生まれてくるときは、(死ぬことのないように) もっと運が良いといいね」と考えることは、ルーディだけではなく産まれてきて間もなく命を落とした子供に対して、軽々しく口にすることはできないような類のものであり、時間が経過しているせいもあるが、子どもを失った親としては、その対象との距離を取っているようにも読める部分である。ブルームがその悲しみの感情のみに拘泥しない様子は以下の引用でも確認できる。

彼は黙った。その怒った口ひげからミスタ・ブルームは目をそらし、ミスタ・パワーのおだやかな顔とマーティン・カニンガムの目や顎ひげが重々しく揺れているのを見た。やかましい身勝手な男だ。自分の息子のことで頭がいっぱい。当然だろう。手渡すべきもの。もし

ルーディが生きていたら。大きくなるのを見れた。家の中に響く声。イートン・スーツを着てモリーと並んで歩いて。おれの息子。息子の目に映ったおれ。不思議な感じだろう。おれから出たもの。まったくの偶然。レイモンド台町の家で彼女が窓際に立って、悪を行うことを止めよの扉のそばで犬と犬がやっているのを眺めてたとき。巡査がにやりとこちらを見上げていた。彼女はクリーム色のガウンを着ていて、裂け目を全然繕わなかった。ねえ、ちょうだい、ポールディ。ああ、あたしもうたまらないわ。かくて生命ははじまる。(6. 72-81, 222頁)

ブルームの連想は同乗者の顔の評価から、息子スティーヴンのことを気にするミスタ・ディーダラスへと、そしてそこから死んでしまった自らの息子のルーディの成長した姿へと展開する。さらに彼の意識は自らの息子を追悼する感情から離れ、死んでしまった息子の誕生につながると推測できるような妻モリー・ブルームとの肉体関係の場面へと移っていく。

以上の二つの引用を見ただけでも、家族を亡くしたにもかかわらず、その悲しみとある一定の距離を保とうとするブルームの特殊性が際立って描かれているように思える。死者、たとえその対象が自分の息子であっても、彼は深く哀悼の意を表すことはない。死者とあえて距離を取ろうとするブルームの姿は、すこし奇妙なように映るだろう。彼の死者との距離感を考えることはブルームの生に対する考えかたを理解する手掛かりにもなり得る。ブルームの生に対する認識が反映されているのが次の二つの印象深いセンテンスである。

必ず片方が先に行くもんだ、一人ぼっちで土の下に。(One must go first : alone, under the ground) (6. 553, 254頁)

死の只中においてわれらは生のなかにある。両方の端は出会う。

(In the midst of death we are in life. Both ends meet.) (6. 759-760, 267頁,
下線強調は引用者による)

最初の引用は、ディグナムの妻が夫に先立たれてどう思っているかをブルームなりに想像している場面で語られる。そして次の引用は祈祷書の中の一節を引用しながら、墓地の管理人とその妻のコミュニケーションをまたもやブルームが勝手に想像している部分で語られるが、この二つの引用を続けて読むとき、我々はブルームの死生観というものをはっきりと認識することができる。つまり、以前から指摘されているが、死者との繋がりが、あくまでも生と死の一つのヴィーコ的な連関する輪の中で生を意識していると考えることができよう。「両方の端が出会うんだ」という言葉は、生と死が一つのサークルを描きながら、永遠に続いていくイメージを喚起する。この死者と生者の繋がりを認めるイメージにはもしかしたらオカルティズムやスピリチュアリズムの影響が見取れるかもしれない。そう考えると確かにブルームは、死者が寂しくならないように棺桶の中に電話を入れて、家族とコミュニケーションが取れるようにするべきだと考えたり(6. 867-869, 275頁)、蓄音機を使って死者との会話を可能にしたらいのではと考えたりする(6. 962-969, 281頁)。これは当時 W. B. イエイツ (W. B. Yeats) やたびたび『ユリシーズ』内で言及される AE ことジョージ・ウィリアム・ラッセル (George William Russell) が傾倒していたオカルティズム、いわゆる当時の神智学 (Theosophy) にブルームが強く影響を受けているという描写である可能性を排除できないが、ただこういった彼の言葉からは少なくとも、死や死者そのものへの畏怖を読み取ることは難しい。

ブルームの生と死についての感覚を問題にするにあたって、ここでいわ

ゆるマッキントッシュの男がなぜこの「ハデス」で初めて『ユリシーズ』の中に登場するのかについて考えてみたい。重要なのはこの「ハデス」という挿話で小説の中に初めて導入されるキャラクターだということだ。ブルームはディグナムが埋葬される直前にマッキントッシュを目にし、そして周囲の人物も目撃するが、だれもその名前を知る者はいない。謎めいた存在であるがゆえにブルームの関心だけではなく、長らく『ユリシーズ』読者の関心をもひきつけてきたキャラクターである。エンダ・ダフィー (Enda Duffy) はフレデリック・ジェイムソン (Frederic Jameson) を援用しながら、『ユリシーズ』の舞台であるダブリンは、中世の市民や組合の集会の場に似ているため、ほとんどのキャラクターが顔見知りのように描かれていると述べている。ジョイスは同じ階級に所属する人物たちだけを描いたため、ほとんどが顔見知りのように読者には感じられるのだと結論づけているのだ¹⁰⁾。となると、この名前もはっきりと説明されることのないマッキントッシュの男とはいったい誰なのであろうか。

「ハデス」においてマッキントッシュの男がブルームにもたらすものは、『ユリシーズ』全体を通して考えると、ブルームの名前の改変であり、それによってブルームのアイデンティティーは揺らぎを見せる。ブルームはマッキントッシュの男の姿を初めて見た後でハインズという新聞記者に、ディグナムの葬儀の出席者としてファーストネームを聞かれる。どうやらハインズはブルームのファミリーネームしか知らなかったようであるが、のちの第16挿話で夕刊にその参列者の記事が出ると、ブルームの名前は L. Boom と誤植され、記載されてしまう。そのような意味でブルームとマッキントッシュの男の関係性は『ユリシーズ』において検討するに値する問題であるが、あくまでも死者との関係性を描く「ハデス」挿話においては、違った側面が見てとれるだろう。ハインズはブルームの名前を聞いた後で、マッキントッシュを着た男の名前をブルームに確認し、

ブルームは「マッキントッシュ（を着た男のこと）だね」と答えるのだが、それをハインズは名前だと思い込んでしまう。情報の誤伝達の好例であるが、その返事をブルームがした後、忽然とその姿は消え去ってしまう。

——ちょっと教えてほしいんだけど、とハインズが言った。あの男を知っている？ あのへんに立ってたあの……

彼はあたりを見まわした。

——マッキントッシュ (Macintosh) だね。うん、ほくも見たよ、とミスタ・ブルームは言った。どこにいるのかな？

——マッキントッシュ (M'Intosh), とハインズは走り書きしながら言った。おれの知らない男だ。それが名前かい？

彼はあたりを見まわしながら離れて行った。

——違うよ、とミスタ・ブルームは振り返って呼びとめようと声をかけた。おい、ハインズ！

聞こえなかった。どうしたんだろう？ どこに消えたのかな？ 影も形もない。なんと不思議な。見た人いませんか？ K, E, ダブルL。見えなくなった (Become invisible)。まったく、いったいどうなったんだ？ (6. 891-901, 276-277頁)

我々はこの 'invisible' という形容詞から、マッキントッシュの男という存在が一種の亡霊、幽霊であったのではないかと推測したくなる誘惑に当然駆られるはずである¹¹⁾。この場面が墓地であり、さらにこの墓地という場所がジョイスの計画表の中で冥界ハデスと対応していることを考えればなおさらであろう。マッキントッシュの男の正体に関しては長らく議論が展開されてきたため、ここで簡単に結論を出すことは難しいが、仮にこのマッキントッシュの男が幽霊、亡霊だと考えるならば、ブルームがその後

も強く関心、あるいは妄執と言ひ換えることができるような感情を持つ理由をも考えなくてはならないだろう。ブルームは本挿話の最後で次のように言う。

[中略] もう一つのあの^{ワールド}世界は嫌いですと彼女が手紙に書いていたな。おれだっていやだ。まだこれから見たり聞いたり感じたりしたいものが山ほどある。すぐそばで生きている暖かい体の感触。彼らは蛆虫のうごめくベッドで眠っていればいい。まだ当分おれは彼らにつかまらないぞ。暖かいベッド、暖かい血のみなぎる生命。(6. 1002-1004, 283頁)

前述したように、ブルームの意識の中では死と生は分離不可能なものである。死と生による単純な二項対立を排除する認識をブルームが変えることはないだろう。そして人間生きていれば必ず死ぬのだと述べた彼の認識もおそらく変わることはない。しかし死という終末 (end) がやってくるまで、彼は自らの生を全うしようと決意する。そのように考えるのであれば、文字通り死者あふれるダブリンの中であっても、ブルームは生、あるいは現実に意識的であると言うことは可能だ。死／過去と地続きになった生／現実を重視すると考えるにいたるブルームであるが、マッキントッシュの男が亡霊だとするならば、ブルームの不安感や『ユリシーズ』の中で何度か話題にのぼることも理解できるのではないだろうか。つまり、生にこだわるブルームにとっては、マッキントッシュの男は死者であるのだ。その単純な解釈だけではおさまらない。もう一步踏み込めば、ブルームという存在の読み直しが可能になるとは言えないだろうか。つまり、ユダヤ人と認識されているせいで、周囲から疎外され、ダブリン・コミュニティの周縁におかれているキャラクターとは言えないという可能性が浮上

してくるのだ。もう少しわかりやすく説明すれば、マッキントッシュの男という存在になぜブルームがこだわるかという、マッキントッシュの男は亡霊であると同時に、生者たちの世界、つまり、ダブリンの固定化されたコミュニティの中に存在する、ある種の亀裂であり、それが存在することによってその閉じられた共同性は決して完成されることがないからだ。ダフィーはこの未完の共同体について、『ユリシーズ』において、登場人物たちが、ダブリンの全人口の一部に過ぎないにもかかわらず、社会の中枢に位置するよう思えるのはなぜかと問う。それは、登場人物たちがおなじ場所をうろついているからなのだと説明し、さらに興味深いことを述べる。『ユリシーズ』で描かれるダブリンという都市は、政治権力の中心を持たない場所であり、共同体の場として成立しえないと述べるのだ¹²⁾。ダフィーが述べていることは、換言すれば、『ユリシーズ』に登場するキャラクターがある特定の共同体に属さない、周縁的な存在であるということであろう。ブルームが「マッキントッシュの男」の存在に憑りつかれ、おびえるというのは、ダブリン・コミュニティ特有の閉鎖的空間を希求するブルームの欲望が存在していると言うことも可能だろう。コミュニティから排除されたブルームとマッキントッシュの男の関係性がもたらすものは、ブルームのコミュニティに包摂されたいという願望とそのコミュニティの完全さへの欲望である。さらにブルームの周縁性は彼だけのものではなく、すべてのダブリン市民に共通したものであると考えることができるのだ。

IV.

本論で筆者が明らかにしようとしてきたのは、ブルームが、レイモンド・ウィリアムズ (Raymond Williams) の言葉を借りれば「わかる社会」(knowable communities) への欲望を抱いているということが、マッキン

トッシュの男という存在によって顕在化するということであった。『若い芸術家の肖像』(*A Portrait of the Artist as a Young Man*, 1916)の終りでステイーヴン・ディーダラスは、イカロスのように祖国アイルランドを離れ「沈黙と、流浪と、そして狡智」(silence, exile, and cunning) (247)を使い、「いまだ創られざるぼくの民族の意識」(the uncreated conscience of my race) (253)を創るのだと宣言した。そして、『ダブリナーズ』の中で描かれるのは、麻痺状態にあるダブリン市民たちであった。その二作品で描かれたダブリンは、ユートピア的な空間としては表象されておらず、むしろ逃れるべき場所であり、その閉塞感が強調されてきた。つまり『ダブリナーズ』においては麻痺の中心として、『肖像』ではイカロスが飛び立つ場所として描かれていた。しかし『ユリシーズ』の中でブルームという存在は、そこから飛び立とうとも望まないし、そこで麻痺状態にも陥っていない。当然我々が理解するのはジョイス作品におけるダブリン表象が変化しているということである。『肖像』や『ダブリナーズ』で描かれていたのは、逃れるべき対象、足かせとしての都市ダブリンであったということだ。それに対し、『ユリシーズ』ではダブリンという都市は小さなコミュニティとして描かれ、そこで一見周縁に追いやられているブルームだが、彼には悲壮感はない。ブルームの秘められた欲望とは、その小さな共同体へ参加することであり、その欲望はマッキントッシュの男という謎の存在によって明確になるのだ。

注

- 1) 本稿は、日本ヴァージニア・ウルフ協会第32回全国大会（於関西学院大学、2012年11月18日）における研究発表原稿に加筆・訂正を加えたものである。
- 2) 本挿話に描かれる時間とプロスペクト墓地までの距離を合わせて考えると、馬車は比較的はやいスピードで移動しているとイアン・ガンとクライ

- ブ・ハートは指摘している (39)。なおイアン・ガンとクライブ・ハートやニコルソンによって、馬車がどの道順をたどって、プロスペクト墓地へと向かったのが明確にマッピングされている。
- 3) 本稿における『ユリシーズ』からの引用にはすべて Gabler 版テキストの挿話数と行数を括弧内に示す。なお対応する日本語が参照できるように頁数の前半の数字は Gabler 版、後半の数字はジェイムズ・ジョイス『ユリシーズ』丸谷オ一、永川玲二、高松雄一訳 (集英社文庫ヘリテージシリーズ, 2003) の頁数を併記しているが、適宜引用者による変更が含まれている。また引用文中の強調はすべて引用者による。
 - 4) このブルームと同乗者たちの溝に関して、道木は「馬車に乗り合わせた四人の男は彼等だけの「サロン」を形成して」(118) いると述べている。さらに女性が葬儀に参列しないことの不自然さを挙げ、葬儀や墓地の描写が「父権的な当時のアイルランド社会を象徴的に表すために再構築されている」(118) と指摘し、彼らのホモソーシャルな関係性を示唆している。
 - 5) 計画表に示されているのは、各挿話の表題や時刻、色彩、象徴などであるが、「ハデス」挿話には、色彩に「白、黒」など死のイメージを想起させるものが与えられている。
 - 6) たとえばウルフの『ダロウェイ夫人』を都市小説として読み込んでいる刺激的な論文として挙げられるのは、河野「都市と田園のテクノロジー——歩く『ダロウェイ夫人』」である。ウルフのモダニティに対する態度に関して河野は、「都市の経験を疎外されたものとは見ず、肯定的に表象する流れの最先端に『ダロウェイ夫人』をおくことに批評のコンセンサスはある。」(47) と述べ、ある一定の評価をしている。だが、アーバン・パストラルという鍵概念を紹介しながら、『ダロウェイ夫人』は、「瓦解しつつあった帝国主義的・トーリーのイングリッシュネスに代わる「新たなイングリッシュネス」^{ネイション}を、「新たな国民」を構想するという政治的アジェンダを隠し持っていた」(52) と指摘している。
 - 7) 本稿における『ダブリナーズ』からの引用はすべてジェイムズ・ジョイス『ダブリンの人びと』米本義孝訳 (ちくま文庫, 2008) を参考にした。
 - 8) 結城英雄『「ユリシーズ」の謎を歩く』, 137-138頁。
 - 9) ここでアダムスはブルームの即物的な性格こそが、ダブリン市民たちの共同性との距離感を生む原因となっていると指摘している。Adams, R. M. “HADES”, p. 98.
 - 10) Enda Duffy, “Disappearing Dublin : *Ulysses*, Postcoloniality, and Space.” p. 48-49.

- 11) ブルーム自身、葬儀に参列している人数を数え、マッキントッシュの男が13番目に数えられることから、死を連想する。「ミスタ・ブルームはずっと後ろで帽子を手にして立ち、帽子をかぶっていない頭の数を数えた。十二。おれが十三番目。いや、あのマッキントッシュの男（The chap in the mantosh）が十三番目。死の番号。あの男はいったいどこから出て来たんだ。礼拝堂にはいなかったのは確実。でも十三がどうとかってのは馬鹿げた迷信だ。」（6. 824-827, 272頁）
- 12) Enda Duffy, *op.cit.*, p. 49.

引用参考文献

- Adams, R. M. "HADES", *James Joyce's Ulysses ; Critical Essays*. Ed. Clive Hart and David Hayman. Berkeley : University of California, 2002. 91-114. Print.
- Benstock, Bernard. *Narrative Con/texts in Ulysses*. Urbana : University of Illinois, 1991. Print.
- Duffy, Enda. "Disappearing Dublin : *Ulysses*, Postcoloniality, and Space." *Semicolonial Joyce*. By Derek Attridge and Marjorie Elizabeth Howes. Cambridge, U.K. : Cambridge UP, 2000. 37-57. Print.
- French, Marilyn. *The Book as World : James Joyce's Ulysses*. London: Abacus-Sphere, 1982. Print.
- Gibson, Andrew. *Joyce's Revenge : History, Politics, and Aesthetics in Ulysses*. Oxford : Oxford UP, 2002. Print.
- Gifford, Don, and Robert J. Seidman. *Ulysses Annotated : Notes for James Joyce's Ulysses*. Berkeley : University of California, 1989. Print.
- Gunn, Ian, Clive Hart, and Harald Beck. *James Joyce's Dublin : A Topographical Guide to the Dublin of Ulysses : With 121 Illustrations*. London : Thames & Hudson, 2004. Print.
- Joyce, James. *Dubliners*. Ed. Terence Brown. London : Penguin, 2000. Print.
- . *A Portrait of the Artist as a Young Man : Text, Criticism, and Notes*. Ed. Chester G. Anderson. New York : Penguin, 1977. Print.
- . *Ulysses*. Ed. Hans Walter Gabler, Wolfhard Steppe, and Claus Melchior. New York : Vintage, 1993. Print.
- Kenner, Hugh. *Dublin's Joyce*. New York : Columbia UP, 1987. Print.
- . *Ulysses*. Revised ed. Baltimore : Johns Hopkins UP, 1987. Print.
- Nicholson, Robert. *The Ulysses Guide : Tours through Joyce's Dublin*. Dublin : New Island, 2002. Print.

Sherry, Vincent B. *James Joyce's Ulysses*. Cambridge, U.K. : Cambridge UP, 2004. Print.

ウィリアムズ, レイモンド『田舎と都会』晶文社, 1985年。

川口喬一『「ユリシーズ」演義』研究社, 1994年。

河野真太郎「都市と田園のテクノロジー——歩く『ダロウエイ夫人』』『ヴァージニア・ウルフ研究』第24号, 2007年, 49-60。

-----。「都市の農夫——ホープ・マーリーズと遊歩者のユートピア」『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』遠藤不比人ほか編, 研究社, 2008年, 135-163。

ジョイス, ジェイムズ『ダブリンの人びと』米本義孝訳, 筑摩書房, 2008年。

-----。『ユリシーズ I』(集英社文庫ヘリテージシリーズ)丸谷オー・永川玲二・高松雄一訳, 集英社, 2003年。

-----。『若い芸術家の肖像』大澤正佳訳, 岩波書店, 2007年。

ジンメル, ゲオルグ「大都市と精神生活」『ジンメル・エッセイ集』川村二郎訳。平凡社ライブラリー, 1999年, 173-200。

田多良俊樹「薔薇十字会員の亡霊——“The Sisters”とオカルティズム」*Joycean Japan* No. 23, 日本ジェイムズ・ジョイス協会, 2012年, 24-36。

道木一弘『物・語りの『ユリシーズ』』南雲堂, 2009年。

結城英雄『ユリシーズの謎を歩く』集英社, 1999年。

-----。「ジョイス時代のダブリン (12)」『法政大学文学部紀要』第63号 2011年, 15-28。法政大学学術機関リポジトリ。法政大学文学部, 1 Oct. 2011. Web. 4 Nov. 2012. <<http://hdl.handle.net/10114/6794>>.

桃尾美佳「自分だけの部屋——“A Painful Case”に見る不在の詩学——」*Joycean Japan* No. 23, 日本ジェイムズ・ジョイス協会, 2012年, 10-23。